

## 令和3年度（2021年度）チャネルキャットフィッシュ採捕状況

石崎大介・田口貴史

### 1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加している。拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐために、採捕情報を収集して生息状況を把握した。

### 2. 方法

県内の漁業協同組合にチャネルキャットフィッシュが採捕された場合には、水産試験場に連絡するように依頼し、漁業者により採捕された全ての個体を回収した。回収した個体は、採捕日、採捕場所、全長、標準体長、体重を記録した。あわせて、水産試験場が実施した調査および滋賀県漁業協同組合連合会（以下、漁連）が実施した駆除事業における採捕個体も同様に記録した。また、一部の漁業者に依頼した漁獲日誌および漁連と水産試験場による採捕データから、延縄の針100本あたりの採捕数（CPUE）を求めた。なお、採捕場所は県内の水域を北湖、南湖、瀬田川洗堰（以下、洗堰）上流の瀬田川（瀬田川上流）、洗堰下流の瀬田川（瀬田川下流）に区分した。

### 3. 結果

2021年度の本種の採捕数は南湖23個体、瀬田川上流70個体、瀬田川下流144個体であった（図1）。北湖での採捕はなかった。南湖での採捕数は過去最も多かった。瀬田川上流は過去2番目に多く、昨年度と比べて増加した。瀬田川下流でも過去2番目に多かったが昨年度と比べて減少した。各水域のCPUEは、南湖は過去最も高くゆるやかに上昇傾向である。瀬田川上流は2018年から2020年まで減少傾向であったが、2021年は2020年と同程度で横ばいであった。瀬田川下流については減少した（図2）。

南湖では採捕数、CPUEともに過去最高でど

ちらも増加傾向であり、注意が必要である。瀬田川上流では2019年に大量の幼魚が発生したが、同年度から漁連が駆除事業を実施しており、その効果によりCPUEは減少傾向から横ばいを維持していると考えられる。

琵琶湖内の漁業を守るためには洗堰の上流側での対策が重要であるが、瀬田川下流からの新たな個体の遡上による侵入もあると考えられることから、瀬田川下流での有効な対策を実施する必要がある。

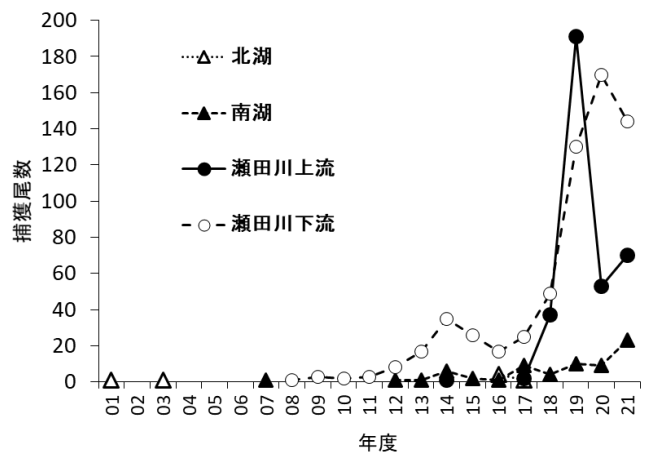


図1 チャネルキャットフィッシュの採捕状況

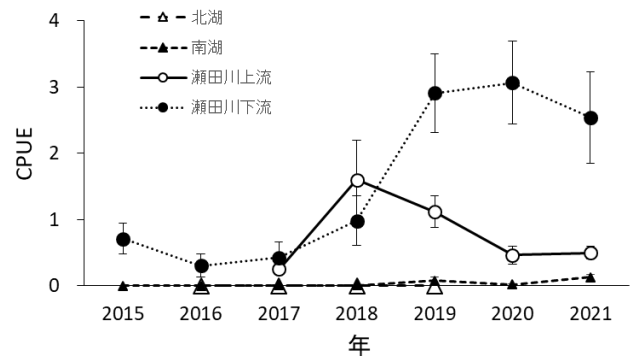


図2 各水域の延縄によるチャネルキャットフィッシュのCPUE